〈本郷キャンパス〉
学校法人文京学園
文京学院大学外国語学部・経営学部・人間学部・保健医療技術学部／大学院／文京学院大学生涯学習センター
〒113-8668 東京都文京区向丘1-19-1
☎大 03-3814-1661 生涯 03-5684-4816
文京学院大学文京幼稚園
〒113-0023 東京都文京区向丘 2-4-1
☎幼 03-3813-3771
〈ふじみ野キャンパス〉
文京学院大学人間学部・保健医療技術学部／大学院／文京学院大学ふじみ野幼稚園
〒356-8533 埼玉県ふじみ野市亀久保1196
☎大 049-261-6488 幼 049-262-3806
〈駒込キャンパス〉
文京学院大学女子高等学校／文京学院大学女子中学校
〒113-8667 東京都文京区本駒込 6-18-3
☎03-3946-5301

文京学院
令和元年（2019年）
8月31日
第752号
発行
学校法人文京学園
http://bgu.ac.jp

大学

「エスカレーター安全利用啓発活動」活発に

経営学部新田都志子教授（流通・マーケティング研究）のゼミナールに所属する学生たちが、「消費者の行動をデザインの力で変える」という観点で「エスカレーター安全利用啓発活動」を展開し、成果を上げています。

マーケティングを研究する新田ゼミでは、「社会の課題をマーケティングの力で解決する」というテーマのもと、2017年より「エスカレーターの片側乗り」の現状を研究・分析しています。本来エスカレーターは「全ての人が立ち止まり、両側に乗る」ことを安全基準として設計されています。現状の利用方法は事故に繋がり得るため、全ての人が安全に安心して利用できるような配慮・措置が必要です。学生たちは、首都圏の駅や商業施設、エスカレーター業界にヒアリングを重ねるとともに、消費者行動の観点から、ステップや手すりにおける「人の行動を変えるデザイン～思わずつかまりたくなる ぎゅっ／思わず乗りたくなる足型」の考案・設置や、SNSを活用した意識調査を進めてきました。

新田ゼミの矢内さん（右）と安藤さん（渋谷ヒカリエにて）

2019年度は、次の3つの「エスカレーター安全利用啓発活動」に参画し、各施設・交通機関にて、新田ゼミが提案したエスカレーターデザインが採用されています。デザイン監修は、経営学部倉嶋正彦教授・ゼミナールです。

①森ビル株式会社が六本木ヒルズメトロハット内のエスカレーターで7月22日から行った「2列に止まって乗ろうキャンペーン」へ参画。「両側に乗っても良い」ことを視覚的に伝える足形のデザインを提案しました。デザイン採用にあたっては、学生が男性用・女性用・子ども用・補助犬用などの複数パターン、また東京都が発表しているユニバーサルカラーデザインを参考にしたカラーバリエーションを提案。実地検証を経て決定したデザインは、エスカレーターの昇降切り替えにも対応した、実用的なものとなっています。

また、学生自らエスカレーターステップデザインの実施前後の行動変容について、観察法で調査も実施。8月8日から10日には、デザイン実施後のアンケート調査をはじめとした実施効果検証を行いました。

②都営大江戸線「中野坂上駅」「新宿西口駅」「飯田橋駅」内のエスカレーターの手すりに、学生が考案した「思わずつかまりたくなるデザイン ぎゅっ」が設置されています。

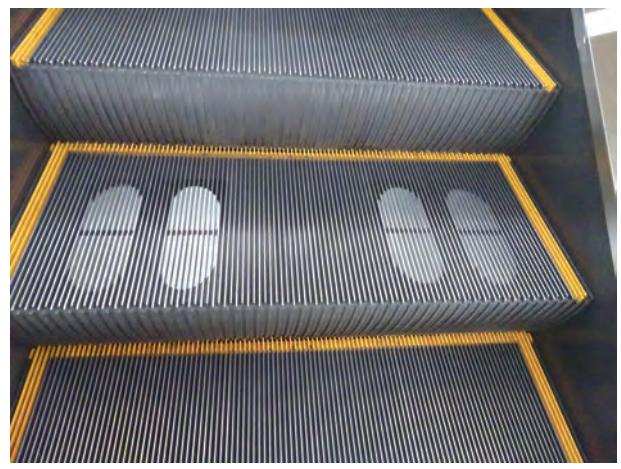
学生考案の動物柄が目を引くデザインで、両側乗車のピクトグラムと思わずつかまりたくなる「ぎゅっ」の文字の他にも「つかまってね」と「たちどまってね」という言葉を入れ、エスカレーターの安全利用啓発を促しています。

③NHKが7月20日から7月24日まで「渋谷ヒカリエ」で開催した「Nスポ！2019-SHIBUYA-」企画内で「思わずつかまりたくなるデザイン ぎゅっ」と「足型デザイン」を設置しました。同イベントの主旨にちなんで、スポーツをテーマとした手すりデザインとスニーカー柄の足型を考案しています。

中野坂上駅の「動物柄」デザイン

また、同イベント内で開催されたトークステージ『未来スイッチ 2020その先へ』に経営学部2年の安藤佳奈さんと矢内大晴さんが登壇しました。

ステージ上では、NHKアナウンサー他3人の出演者とともに「エスカレーターの乗り方どうする？」についてトークセッションが行われ、学生たちはこれまでの活動や今後の抱負についてトークを繰り広げました。


六本木ヒルズの「足型」デザイン

大学

ロンドン芸術大学×文京学院「連携プログラム」で絆深める

2019年度「短期フィールドプロジェクト I・II」の一環で、今年もロンドン芸術大学（UAL）からチャールズ・アボット先生が来校し、本学との連携プログラムを行いました。外国語学部・経営学部・人間学部・経営学研究科の学生21名が参加しました。

7月24日、本郷キャンパスで、島田昌和理事長・教授による「Wayfinding プロジェクト これまでの軌跡」が行われました。

25日、学生たちは実地踏査のために川越市へ。本郷キャンパスでは本学教職員を対象にチャールズ先生による「昨年のプロジェクト作品のフィードバック」「Charlesの研究や過去の発表作品等」をテーマとした研究会が行われました。

26日、本郷キャンパスで昨年のプロジェクトで考案された川越巡りパスポート「finding Kawagoe のブラッシュアップ」をテーマに、川越仁恵准教授がワークショップを実施しました。

29日、人間学部の小林剛史心理学科長・教授、長野祐一郎准教授の指導により、ふじみ野キャンパスでワークショップ「集計分析」が行われました。

30日、本郷キャンパスでは、川越准教授によるワークショップ「川越市の実地踏査による作品の検証」を実施。ふじみ野キャンパスでは、30日に小林教授と長野准教授によるワークショップ「実地調査・集計分析」、31日にはワークショップ「集計分析」を実施。

8月1日、ふじみ野キャンパスで小林教授と長野准教授によるワークショップ「発表準備」が行われました。

そして2日、川越プリンスホテルにて、活動報告会を実施。今後の活動に向けて、一同絆を深め合いました。

KAWAGOE Wayfinding 報告会で（川越プリンスホテル）

Green Spirits

更なる向上を目指して

外国語学研究科委員長
外国語学部教授
桑子順子

文京学院大学大学院外国語学研究科は、2005年開学で、既に70名以上の修了生を輩出しています。その研究科委員長に着任するのは大変身の引き締まる思いでした。修了生が次々と社会で活躍をしているこれまでの実績をふまえて、新たな社会的ニーズにもこたえられるように懸命に努力したいと考えています。

2019年度からは第一に、外国語学研究科の特徴の2方向化を明確化すること、第二に、共同研究、国際連携に基づくカリキュラム改革、という目標を掲げて、更なる向上を目指していきます。オーソドックスな研究者の育成を行うという研究科の従来のアプローチを継続していくと同時に、キャリア・アップや社会活動に貢献する道を拓くことを支援するという2つの方向を目指すために、先生方と話し合いながら具体化を進めていこうとしています。

今後は先生方による共同研究をなるべく多く計画・実行していただき、その研究成果を教育の現場でも実践してもらう予定です。更なるグローバル化を目指し、積極的な国際連携を図っていくために外国語学研究科の将来構想を計画中です。

外国語学研究科では通算で10回、2012年から文京学院大学生涯学習センターとの連携講座を実施してきています。社会人に開かれた学びやすい環境として夜間開講を中心としていますので生涯学習センターの講座との連携は容易で、主として映画などの映像を扱ってきています。今回は、〈映画で学ぶ、映画を学ぶ〉と題してすべてのカテゴリーの先生方がそれぞれ映画を選んで専門分野からの講義をします。映画は、文京学院大学の学生の皆さんもとても興味があると思いますので、文京祭初日にゲスト講師を迎えてシンポジウムを無料で開催します。さらに日本映画学会からも講師を招いて「カーボーイとジェンダー」という特別講義も無料で開きますが、これらは、共同研究ともリンクしています。ぜひ皆さんもご参加ください。アカデミック・ライティングの共同研究も実践し、その成果を活かしながら科目内容のブラッシュ・アップも図っていくことになりました。このような活動も新規に加えながら、頑張りますので是非とも応援してください。

大学 特集 「てっぺんフォーラム」

先輩から後輩へ伝える「気づき」と「ヒント」

「自分のてっぺん」を目指して努力を重ね、結果を出した学生たちが、今年も輝く笑顔で後輩にその経験を伝えました。先輩の珠玉の言葉から、後輩たちは様々な「気づき」と、学生生活をいかに過ごすかの「大きなヒント」を得ました。

ふじみ野キャンパス（6月29日・講堂）

工藤翠学生実行委員長（人間福祉学科3年）の挨拶で、1年生対象の「てっぺんフォーラム」がスタート！　金子由依さん（同3年）の司会で、次の皆さんが発表しました。

司会の金子さん

工藤学生実行委員長

なお、発表者には「期待」（発表者の思いが伝わり、大学生活への期待が高まった）「発見」（「気づき」を得られるような影響を受け、見習いたいと思った）「活力」（パワーをもらい、自分が取り組んでいることをさらに極めたいと思った）の副賞が、上村佳世子教職員実行委員長（副学長・人間学部教授）より贈られました。

スイッチ・オン賞

「期待」まちづくり研究センター
小船屋会理さん（人間学部コミュニケーション社会学科2年）、鶴岡真生さん（同2年）

小船屋さん（左）と鶴岡さん

まちづくり研究センター（まちラボ）に所属する2人は、学生研究員として「空き家・空き店舗を活用した地域活性化プロジェクト」に取り組んでいます。昨年は、地域のおかめフェス「ハロウィン」に参加。「おかめ新聞」を発行し、空き店舗で「駄菓子屋ふみちゃん」を運営しました。今年は「まちづくりワークショップ」を開催し、地域・行政などの皆さんと意見交換を実施。あやめ祭に向けても野菜代行販売に加え、地域の商店フースを開く予定です。

後輩には「積極的に行動する」「様々な経験をする」ことの大切さを伝えました。

「活力」
鈴木理子さん（保健医療技術学部理学療法学科2年）

鈴木さん

昨年の「てっぺんフォーラム」でスイッチ・オンした鈴木さんは、留学生のホストファミリーや、カナダへの短期留学に挑戦し、苦手な英語を克服。その中で世界の共通言語は「笑顔」であると確信しました。それらの経験を活かし、現在はJPTSA（日本理学療法学生協会）国際部で、世界の理学療法を学ぶ学生たちと交流。同組織の幹部になることを目標に立候補も。次の目標は、青年海外協力隊に参加すること。

後輩には「興味があることには果敢に何でも挑戦してほしい」と話しました。

「発見」
大村和可さん（人間学部心理学科3年）

大村さん

入学当初、やりたいことが見つからなかった大村さんは、現在、地域活性化プロジェクトの一環でフェアトレードカフェを商店街で開く計画を立てています。主要メンバーの丸山春也さん（同3年）は会計と備品の管理、田中利奈さん（コミュニケーション社会学科3年）は呼び込み、藤森慎太郎さん（人間福祉学科3年）はポスターデザイン、大村さんは全体の最終チェックを担当と役割分担し、話し合いを重ねながら夢に向かって邁進中です。

後輩には「仲間と共に情熱をもって目標に向かうことの大切さ」を伝えました。

「期待」
大塚萌さん（人間学部人間福祉学科4年）、金井健さん（同3年）、床鍋恕明さん（同2年）、米岡里織さん（同2年）

（左から）大塚さん、床鍋さん、米岡さん、金井さん

4名が共通で挑戦したのは短期フィールドワークでのカナダ留学。カナダと日本の福祉に関する法律の違いを知った大塚さんは、現在、卒論に向けて研究を継続。米岡さんは「英語が解らない悔しさを知ったのも、思い切って留学を決意したから」と「行動する大切さ」について話しました。金井さんは「伝えたい」という強い気持ちをもって人と関わり、積極的になりました。床鍋さんは1年次にもマレーシアに行き、何事も自分から動かなければいけないことを学びました。4名は後輩に「失敗を恐れずに挑戦を」と伝えました。

てっぺん賞

「期待」
植松柚衣さん（人間学部心理学科3年）

植松さん

植松さんは、大学ではもっと広い世界を見たいと5つのことに挑戦。まず「GCI生」として学び、ランゲージ・サロンを活用。2つ目は、夏休みにロンドン芸術大学の学生と共に「Wayfindingプロジェクト」に参加。3つ目は「あやめ祭実行委員」として1年次から関わり、学部を超えて活動。4つ目は「学生会」活動。意見をぶつけ合いながら様々なイベントを行い、達成感を得ています。最後は就活に向けての「インターンシップ」。

後輩には「色々な選択肢をもって経験を積んでほしい」と伝えました。

工藤委員長は「発表が練習時に比べて完成度が高くて驚きました。皆さん、すごいです！　私自身、学ぶことが多くうれしく思いました」と成果を喜びました。

本郷キャンパス（7月6日・仁愛ホール）

萬代寺琴奏学生実行委員長（外国語学部3年）の挨拶で「てっぺんフォーラム」がスタート！　司会は同3年の豊田友里さんと田崎七虹さん。発表者には、絹川直良教職員実行委員長（経営学部長・教授）より表彰状が贈られました。

萬代寺学生実行委員長

司会の豊田さん（左）と田崎さん

スイッチ・オン賞

石井湖真記さん（保健医療技術学部臨床検査学科3年）「私の原動力」

石井さん

2年次に、とてつもない授業量・情報量をこなす中で、苦手な実習が始まり、石井さんは自分に自信が持てなくなりました。そんな時、自分をスイッチ・オンさせたのは「悔しさ」でした。解らないことは何度も教員に質問し、教科書やプリントを何度も確認するうちに、頭の中で教科同士が結びつき「もっと知りたい。もっと学びたい」という想いが芽生え、法医学を学ぶために大学院への進学を決めました。10月からは厳しい臨地実習に向き合います。

後輩には「悔しいと感じた時こそが自分を前進させるチャンス」と伝えました。

佐藤咲耶さん・稲葉愛華さん・江森優圭さん（経営学部4年）「自立の精神は足から」

（左から）稲葉さん、江森さん、佐藤さん

人生100年時代に向けて、福祉をメインテーマにした世代間交流活動をゼロから企画・実行し、新しい仕組み「ノーケア・ケア」を生み出しました。一方的な福祉ではなく、お互いに支え合うコミュニティを作ることを目標に、次々と現れる壁を乗り越え、次のビジョンをもって活動。①他大学や専門家の参加を促し、長期フィールド活動として授業化。②様々な地域に広める。③人生100年時代のマーケティングプラットフォームにしたい。

後輩には「行動の中から生きた成果を見出してこそ得られるものは大きい」と伝えました。

てっぺん賞

土田恵里花さん（経営学部4年）「努力は一生の財産」

土田さん

3年次に関東最大規模のプレゼン大会に出場し、本学経営学部のゼミナール協議会の会長を務めた積極的な土田さん。2年次に参加した海外フィールドワークで1週間のアメリカ研修を通じ、英語力の低さを実感。就職活動に向けてTOEICの目標を700点に定め、隙間時間を利用して計画的に勉強しました。その結果、550点スコアが上り、目標を達成。来春から土田さんは、ITコンサルとして英語を駆使して活躍します。

後輩には「小さな努力の積み重ねで、将来の可能性は大きく拓かれる」と伝えました。

武石彩夏さん（外国語学部4年）「諦めず挑戦することの大切さ」

武石さん

武石さんは、大学生活の中で「全国学生英語プレゼンテーションコンテスト」に一番力を入れて挑戦。同コンテストはプレゼンテーションと質疑応答を全て英語で行う全国規模のマーケティング大会。二次予選に進出した武石さんのグループのテーマは「子どもに対する新たな環境教育の提案」。環境団体や企業へのインタビューで問題点を把握し、小学校で「水の循環サイクル」についての授業をゲーム形式で行って成果を上げたプレゼンをしました。その結果「TOP50」に入賞！

後輩には「諦めなければ道は自分で作れる」と伝えました。

橋本知佳さん・太利咲彩さん・伊藤将太さん・森川風舞さん・三枝大輝さん（経営学部4年）「エスカレーター両側乗りへの道」

（左から）三枝さん、太利さん、伊藤さん、橋本さん、森川さん

「エスカレーターの片側乗り」の現状を研究する5名は、首都圏の駅やエスカレーター業界などにヒアリングを重ね、エスカレーターは「全ての人が立ち止まり、両側に乗る」ことを安全基準として設計されていることを知りました。「両側乗り」を展開するための活動が、メディアに取り上げられ、六本木ヒルズや渋谷ヒカリエなどでも活動。「両側乗り」を採用する鉄道会社も増え、「社会を動かすことができた」と実感しています。

後輩には「可能性を決めつけなければ道は拓ける」と伝えました。

清水沙奈さん（外国語学部3年）「軌跡～私が留学した理由と留学して学んだこと」

清水さん

高校時代にアメリカ留学を経験した清水さんは、大学でもまたアメリカ留学を希望し、入学時からTOEFLの勉強や成績を維持する努力をしてきました。それが実り、留学特待生プログラムBでミネソタ州に留学。教職課程も履修しているため、教育に力を入れているミネソタ州での教育心理学の学びは大きな力になりました。先方の学生は将来の夢を明確に持ち、それに向かって努力する姿が、モチベーションアップに。

後輩には「文京学院でどのように過ごすかは自分次第。新しい経験や挑戦が好きな人には留学を勧めます」と伝えました。

萬代寺委員長は「1年生には『皆さんの参考になりますよ』と話しましたが、私の参考にもなりました。支えてくださった皆さんに心から感謝します」と話しました。

大学 短期大学・経営学研究科OGが「経営者論」を語る

6月24日、大学院経営学研究科修了生の張淑雲さん（2007年修了）と、短期大学英語英文学科卒業生（2000年卒業）の井村久美さんが、島田昌和理事長・経営学部教授が担当する「経営者論」の授業で講義を行いました。

株式会社千手Soft 株式会社三和ソリューション 代表取締役会長 張淑雲さん

張さんは、中国で産婦人科医をしていましたが、日本の医師資格を得るために来日。しかし、医学部の学費があまりにも高いことで夢を諦め、将来の職に繋がる本学経営学部への進学を決めました。3年次には飛び級で卒業し、本学大学院へ進学。「税理士資格」を目指し、大原簿記学校にも通いました。修了後は、税理士事務所に勤務する中で「努力を積み重ねれば、どんな状況に陥ったとしても、困難を乗り越えられる」と考えると同時に、「就職できなかった若者のために仕事をしたい」という気持ちが強まり、「教育」に力を入れた会社を興しました。

それが、IT人材育成事業をメインとする「株式会社千手Soft」です。併せてシステム開発事業をメインとする「株式会社三和ソリューション」も興し、人材提供サービスを加えた事業を展開しています。2009年のリーマンショックのあおりを受けて、エンジニアの3割に仕事がない状態に陥っても、自らが営業に回って仕事を確保しました。

張さんが本学を選んだのは、創立者・島田依史子先生の建学の精神「自立と共生」や、教育の理念「仁愛」に感動したことが理由。現在も、この理念のもと社員に接し「本学で学んだ全てが会社運営に繋がっている」と言います。学生には「社会的な責任感を持つ」「決めたことを変えない」「共同共生意識を持つ」「経験から得た失敗は繰り返さない」などのアドバイスを贈りました。

張さんの夢は、将来的に職業訓練校を開設すること。50代以上の社員や、出産・育児などで外勤業務が難しい社員に訓練校の指導者を任せ、若い世代に経験を伝えると共に、指導者自身も最後まで職業人として輝いてほしいと願っています。

学生からは「苦しかったことは？」「人の上に立つのに必要なことは？」などの質問が次々と上り、張さんはそれぞれ「苦しさは30秒のみ。その後は前進するだけ」「社員が働きやすい良い環境を作ること」と答えました。

また、次の感想が学生から寄せられました。「置かれた場所に文句を言うのではなく、その時の最適な決断の一挙手一投足が現在の張さんを作り上げたのだと思います。張さんはいい意味で諦めることができ、そこで思いとどまることなく次の一手を模索しトライアンドエラーしていく姿はとてもすごいと思いました」

株式会社スリールアーク 代表取締役 井村久美さん

学生時代に品川プリンスホテルでアルバイトを経験し、VIP対応をこなしていた井村さんは、接客の楽しさに目覚めました。短期大学を卒業後、アコム株式会社に就職した井村さんは、株式会社三菱UFJ銀行（現）へ出向し、コンシューマーファイナンスに関わりましたが、三菱UFJフィナンシャル・グループの金融特化型のテレマーケティング会社であるエム・ユー・コミュニケーションズ株式会社の社長から声掛けがあり、アコム株式会社を退社。同社で部長代理として勤務しました。

その間、知人から「食品会社の経営を見てほしい」と依頼があり、売上はあっても赤字が何期も続いている現状を把握。無理・無駄を省いて、2年で再建しました。その経験から「食と職をつなぐ業務」に興味関心を持ち、安定した仕事から転身して株式会社スリールアークを興しました。軸となる「人材紹介サービス」は、直接雇用を希望する求職者を、正社員または契約社員として企業に紹介するサービスで、当初は順調でしたが「お休みが取れない」「お給料が上らない」という理由で紹介先企業では退職者が続出し、井村さんは大きな打撃を受けました。金策や経営変更を余儀なくされましたが、「従業員がいたから頑張れた」と言います。現在では、経営変更後に始めた「食品メーカーの運営代行業」で業績も好調に維持しています。

「手塩にかけて育てた社員から裏切られることはあっても、ただ嘆くだけではなく、そこから学ぶ姿勢が経営者として大切」と、常に社員・スタッフに愛情をもって接しています。

学生には「なぜ仕事をするのか、それは何に繋がるのかなど『考えて仕事をする』ことの大切さ」について伝えました。

学生からは「人の上に立つために大切なことは？」「信念は？」などの質問があり、井村さんはそれぞれ「社員・スタッフに家族と同じ愛情を持つ」「どんな偉い人にも流されずに、自分の意思をしっかり伝える」と答えました。

また、次の感想が学生から寄せられました。「印象に残ったことは、学んだことを次にどう活かせるか、いざというときにその学んだことを引っ張り出せるかが重要なところだということです。自分に足りないのはまさに、この作業だと思います。アルバイトのときや、ゼミでの活動でもそれぞれ学んだことを、次どこで活かせるか意識して考えるような先を読む習慣をつけたいと思いました」

講師の話に耳を傾ける学生たち

大学 公開研究会「外国籍の子どもの支援」について学ぶ

6月29日、本学保育実践研究センターふらっと文京の公開研究会が「外国籍の子どもの保育や学習支援について」をテーマにふじみ野キャンパスで開かれました。15回目の今年は、本学教職課程センターの鈴木みどり先生、本学卒業生で小学校教諭の野田亜紀子先生、幼稚園教諭の脇阪恵利子先生が、豊富な経験をもとに話題提供しました。

（左から）脇阪先生、野田先生、鈴木先生

今や、保育・学校現場は多国籍化され、個々の対応が求められる時代。教員が保護者とも積極的に関わることで両現場の理解を求め、園・学校・家庭が一丸となって子どもを支える必要があります。

3先生の話題をもとに、参加者50名が班ごとにディスカッションを実施。各班の発表では、次のような意見や課題が出ました。

●「子どもへの支援」
★外国籍の子どもが周囲に認めてもらえる場を作る。★遊びの楽しさを通じて人間関係を学べるようにする。★言葉の能力に応じた対応ができない場合もあり、行政の対応が必要と感じる。

●「保護者への支援」
★個別に手紙を書く。★日本の文化を押しつけず、相手の文化を理解する。★教員一人が抱えるのではなく、園・学校全体で支える。★「楽しかった」と子どもと共に卒園できるような雰囲気を作る。

後半では、コーディネーターを務めた加須屋裕子同センター研究員（人間学部児童発達学科長・教授）が「幼児期の言語習得と認知発達の関係」「バイリンガルになるとは」「日本語ができない子どもへの対応」などについて語り、「日本人の教員の支援を受けて育った子どもが、保育・教育の現場に戻り、母語の通訳をしながら外国籍の子どもを支援することは、社会貢献や子どもたちのロールモデルになるため、そのループができることに期待」と結びました。

熱いグループディスカッション

最後に森下葉子センター長（人間学部准教授）が閉会の挨拶。椛島香代・柄田毅・須藤佐知子・菖蒲澤侑・小栗俊之各研究員らも参加のもと、今年もまた、熱く有意義な研究会となりました。

加須屋研究員

森下センター長

島田理事長を囲む井村さん（左）と張さん

高校 理数キャリアコース「科学探究プログラム」続々

この夏季長期休暇中にも、本校「理数キャリアコース」の生徒たちは、「科学探究プログラム」の一環として大学教員による特別授業を受け、勉学に励みました。今回は、実施講座のうち2講座について、雨宮正典高等部副校長によるレポートを紹介します。

学際数理探究 特別授業

8月22・23日、理数キャリアコース高1の生徒たちが、島根大学教育学部の御園真史准教授の特別授業を受けました。内容は「数学的モデリング」について。現在、AI（人工知能）の開発が進み、日常生活の中で活用する場面が増えています。その理論的な基盤になっているのは、「数学」と「統計処理」。現実の社会における様々な問題を解決するための手法として、「数学的モデリング」があります。

数学的モデリングに挑戦

22日の課題は、日常生活の色々な場面でみられる事象から「変数」と「定数」を見つけ出すこと。身近な現象の写真の中から、どれだけこの2つの量を探し出せるか、みんなで真剣に考えました。同じ写真を見ていても、どこに目をつけるのか、どのように表現するのかで、見方は大きく変わります。作業を進めるうちに、みんなの意見に少しずつ変化が出始めました。

23日は、みんなで考えた「変数」や「定数」が、数学的モデリングで取り上げる「量」として適切かどうかの吟味から始まりました。

今考えている「対象」の「属性」や「性質」について、それが定量的なのか、定性的なのか、それらを数値化するために測定する「道具（ものさし）」や、単位などを考えて準備を進めたところで、「給湯器の購入問題」という場面を想定して、実際の数学的モデリングに挑戦。日常生活の問題を数学の問題に変換するために与えられた色々な条件を、数値調整によりグラフ化（可視化）して考え、細かな計算を手分けして作業を進行しました。数式化することが最終的な目標でしたが、実際の関数式は数学Ⅲで学ぶ「分数関数」のため、今後の生徒の楽しみが倍増！

生徒からは「日常生活の様々な場所で数学の知識が使えるということや、現実問題を数学の力で解決できるということ、そして数学は仕事などに関係なく、この社会で生活する人全てに必要であるということを学びました」という感想が聞かれました。

科学知 先端科学講座 「遺伝子解析実験講座」

8月24・25日、理数キャリアコース高1の生徒を対象に、東邦大学理学部生物分子科学科の佐藤浩之教授によるDNA解析講座が行われました。

遺伝関連を調べて発表

24日の実験テーマは「遺伝子で調べるあなたの得意な陸上種目」。頬の内側から各自のDNAを採取し、PCRと電気泳動を用いてDNA解析を行いました。初めて使う実験器具などについて、TA（ティーチングアシスタント）の大学生（本校卒業生）に使い方を教わりながら、丁寧に実験。自分自身のDNAを調べるという初めての体験や実験操作、講義により知識を深めました。また、究極の個人情報であるDNA解析を、色々な分野で活用していく場合の倫理的な課題なども考えるきっかけとなる大変有意義な講座でした。

25日は、本学経営学部の棚橋信雄特任准教授による「遺伝医学と生命倫理講座」を受講。ヒトのDNAを活用する遺伝子科学が抱える問題点について考える講座で、まず「出生前診断」についての動画を見て、みんなでこの問題の重要性を共有しました。続いて、遺伝についての基本事項や、医療現場における遺伝子治療の現状などについて、各自で調べて発表することで理解を深めました。さらに、出生前診断の事例についてロールプレイを実施。自分がその人の立場になってその役を演じることで、それぞれの気持ちを考えながら、遺伝医学の現状や課題とその発展、生命倫理を考えることの重要性について学びました。

午後は、東入間青年会議所ふじみ野部会からロボット科学教育クレファスふじみ野校の石原潤一校長が登壇。「はてな学」として「ドローンがつくる新しい世界」について講義しました。AI革命の真っただ中にある現在、ドローンが人間の労力を軽減する一方、2045年にはAIのIQは無限に達し、人間の仕事が奪われていく驚異についても解説。「でも、人間の人を思いやる気持ちはAIには模倣できない」と結びました。

8月3日は「はてな学」「生き方学」として、人間学部の柄田毅教授が同学部の学生と共に「まなびとあそびのキャンパス」を開催。「カプラであそぼう！ドミノであそぼう！」「えのぐの世界であそぼう」「ウッテミヨー ヤッホー クーキホー」「英語で遊ぼう」「Theボッチャ」「トリックの心理学（マジックサークル）」「しゃぼん玉であそぼう」の7ブースで子どもたちに対応しました。

最終日の8月31日は、一般社団法人 星つむぎの村の高橋真理子共同代表が「ふるさと学」「生き方学」として「プラネタリウム体験！～宇宙と私たちのつながり～」について講義。実際に移動式プラネタリウムで星々を投影し、子どもたちに大きな感動を与えました。

修了式では、高畑学長から個々に修了書が授与され、思い出深い「子ども大学」が終了しました。

大学 「子ども大学ふじみ野」本学で開催

「子ども大学ふじみ野」が7月27日・8月3日・8月31日の3日間、ふじみ野キャンパスで開催され、26名の児童（小学校4・5・6年生）が学生として「勉強学部」で学びを深めました。学長＝高畑博ふじみ野市長、副学長＝木村浩則人間学部長・教授、実行委員長＝梶原隆之同学部教授。

笑顔の入学式

初日午前、入学式での木村副学長、梶原委員長の挨拶に続き、本学保健医療技術学部の上田泰久助教が「はてな学」として「カラダの仕組みを知ろう！～スポーツ障害とは～」をタイトルに講義。スクリーンにポイントを映しながら骨模型を使い、「小学生で多いケガ」「ケガの原因と予防」について解説しました。子どもたちは興味津々で講義に聴き入り、骨模型に触れて骨や筋肉などについて学びました。

午後は、東入間青年会議所ふじみ野部会からロボット科学教育クレファスふじみ野校の石原潤一校長が登壇。「はてな学」として「ドローンがつくる新しい世界」について講義しました。AI革命の真っただ中にある現在、ドローンが人間の労力を軽減する一方、2045年にはAIのIQは無限に達し、人間の仕事が奪われていく驚異についても解説。「でも、人間の人を思いやる気持ちはAIには模倣できない」と結びました。

ドローンを手にする 石原校長

8月3日は「はてな学」「生き方学」として、人間学部の柄田毅教授が同学部の学生と共に「まなびとあそびのキャンパス」を開催。「カプラであそぼう！ドミノであそぼう！」「えのぐの世界であそぼう」「ウッテミヨー ヤッホー クーキホー」「英語で遊ぼう」「Theボッチャ」「トリックの心理学（マジックサークル）」「しゃぼん玉であそぼう」の7ブースで子どもたちに対応しました。

最終日の8月31日は、一般社団法人 星つむぎの村の高橋真理子共同代表が「ふるさと学」「生き方学」として「プラネタリウム体験！～宇宙と私たちのつながり～」について講義。実際に移動式プラネタリウムで星々を投影し、子どもたちに大きな感動を与えました。

修了式では、高畑学長から個々に修了書が授与され、思い出深い「子ども大学」が終了しました。

骨模型を観察する子どもたち

骨模型を使って話す上田助教

「ウッテミヨー ヤッホー クーキホー」で工作中

講義中の柄田教授

高畑学長が個々に修了書授与

「星つむぎの村」の高橋共同代表

新書コーナー

『アクティブ・ラーニングで学生の主体的学びをつくりだす～BGUの魅力ある授業づくり～』編者：木村浩則（人間学部教授）／株式会社冨山房インターナショナル（2019年7月16日）／1,800円（税別）

本学人間学部FD委員会では、多様な学生が入学してくる現状において、学生の学力保障のためにどのような授業改革、教育改革が求められているのかをテーマに、活動に取り組んでいます。本書は、2016年度に取り組んだ実践教育の一環である"アクティブ・ラーニング"の成果についてまとめています。

本書は、主体的に学ぼうとする学生の意識を育成する手法を探究するとともに、その実践と研究の成果、そして「教育力日本一をめざす」本学の講義スタイルを発信するものです。"アクティブ・ラーニング"による授業改善に関心を持つ高校ならびに大学の教育関係者への指南書となっています。

tomoちゃん

ひたむき・まえむき・おもむき

No.57　画：CIP部　乃咲華